



シリーズ：帰国生大学入試（3） なぜ、帰国生入試を受験？

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表
松本 輝彦

私は30年以上も、北米の高校生の日米の大学進学について、情報提供・教育相談・受験指導を行ってきました。その高校生達の中で、帰国生大学入試を受験し、日本の大学に進学した高校生はこれまでに千人を超えます。その高校生達がどんな理由・動機・事情で帰国生入試を受験したのか、数人の例を挙げて、紹介しましょう。そして、その子ども達が、進学後に歩んでいる人生も、可能な限り紹介しましょう。

A 君：日本に憧れて

A 君はアメリカ生まれのアメリカ育ち。しかし、現地校と補習校でバイリンガルに育ちました。日本での生活経験は、2度の小学校での体験入学とそれに続く夏休みだけでした。

アメリカで自営業を営まれるご両親は、A 君のアメリカ生活が長く、現地の生活や学校にもよく馴染んでいるので、「A はアメリカの大学進学」と漠然と考えていました。しかし、A 君が、高校の10年生の時に「日本の大学へ行く」と宣言しました。

その気持ちがあまりに強いので親子で話し合いの結果、補習校をやめ、毎週土曜日に地元の塾で帰国生大学入試の準備クラスを取るようになりました。片道1時間以上の運転を、2年ほど（最初はお母さん、その後本人）続けるようになりました。

日本の大学進学の動機をよく聞いてみると「日本への憧れ」でした。アメリカ社会に対する否定的な態度ではなく、日本の社会・文化に強い興味を抱いていました。日本の若者文化や表面的な流行だけではなく、「まだ、何か良く分からないが、日本のことをもっと知りたい」という気持ちでした。A 君のこの感じ方の基礎は、家庭環境の中で育まれたものであることが、お母さんとお話の中ではっきりと分かったのが、今でも印象に残っています。

現地校の成績も問題なかったし、遅れていた日本語力を向上させる努力を惜まず、小論文の出来栄も向上したので、帰国生入試で日本語の能力を積極的に評価する一流私立大学に挑戦し、無事合格、そして、進学することにしました。

日本の大学進学後は、逆に機会を見つけて、アメリカの両親の元に戻り、英語力の維持に努めました。その甲斐あってか、一流商社に就職し、本人が「面白い」という仕事に日本で従事しています。

日本で知り合った女性と結婚もしました。しかし、ご両親はそのままアメリカ生活を続けておられます。

B 君：無理やり日本の大学へ

「松ちゃん、大学院は必ずアメリカに戻ってくるからね!」

B 君は、お父さんの海外駐在で、小学校低学年の時にアメリカへ。アメリカ生活が非常に良く合って現地の生活を満喫し、「アメリカでがんばる」の口癖どおり、超優秀な現地校の成績をあげていました。

しかし、「駐在員だからいつかは日本に帰る」というお父さんの強い希望で、中学までは補習校に、高校からは帰国受験の塾に通わされました。

12年生の秋、「もうそろそろ帰国になるかも?」というお父さんを説得して、アメリカの大学の将来医学を学べる学部に出願しました。12年生の春になって、アメリカ西海岸でもっとも難関な大学への入学許可を受け取りました。B 君の夢が実現したのです。

しかし、その直後、お父さんの夏からの日本での勤務が決まりました。「残りたい」「連れて帰る」の親子の激しいバトルが続きました。最後は、「日本の医学部を受験」という条件で、親子の妥協が成立しました。

受験までの時間は短い。しかし、B 君は現地校で培った学力と「医学部への夢」を原動力として、受験勉強と帰国生受験を乗り越え、有名私立大学の医学部に合格しました。

アメリカを離れる直前の機会に、彼とゆっくり話をしました。本当に涙を流しながら「松ちゃん、・・・」と最初の言葉を口にしました。駐在員としての父親の立場を理解するものの、自分の夢への想いを断ち切らなければならないB 君の言葉でした。

日本語のハンデを乗り越えて、医学部の勉強を6年間、さらにトレーニングを数年間続けなければならない彼に、アメリカの大学で学ぶ機会は簡単に訪れませんでした。しかし、さらに数年後、医学研究者として「夢」を果たせました。